婦人と新社會

山田わか主筆

九月號

乞食根生の法律化

人、社會、社會學

農村生活と都會生活

私の娘時代と農村

私の中年時代と農村

私の目下の要求

火星、墓地、日本髮

毎月一回一日發行　第五十四號　大正十三年九月一日發行

大正九年二月二十三日第三種郵便物認可
大正十三年八月廿三日印刷納本

東京府婦人と新社會社[illegible]發行

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

乞食根生の法律化

大震火災の一週年となりました。あの驚愕あの戰慄の日を紀念しようとしていろ〳〵の企てがあるようです。其の日を追懷すると云ふことは惡いことではない。けれども、それは費用をかけてわざ〳〵形に現して見なくとも痛い程私共の心のうちには喰ひ入つてゐる事實です。忘れようとして忘れ得ない痛根事です。そんなことにわざ〳〵時間と金をかける必要はない。

それよりも一層大事なことは、大災後の此の一年間公私共に人々は何をしてゐたか？ 復興々々と云ふ聲だけは大きくとも果して實際がそれに伴つて居たかどうか。反省して見る必要があります。

新聞紙上に現れて來る、つまり、世間の問題となる事實を通して見る時には、實に、あの大事變によつて貴いもの有益なものが灰燼に歸し、そして、人間の惡心のみが殘つてゐるかのような心地さへすることは遺憾です。たとへば、諸官省の役人の怠慢、利權あさり、社會の病源なる花柳界のいち早き復興、如何がはしい飲食店の激增、或ひは又、一時的の救濟のために建てたバラックを永久に置かうとする所謂乞食根生の增長、他の言葉をもつて云へば乞食根生を法律化しようとさへしてゐます。燒失區域の區劃整理にした處が健實な市民の意に添ふ處ではなく、あの大事變後であるにも拘らず、やはり、一部の區會議員又は市會議員の食ひ物にならうとしてゐる處さへあります。

あれを思ひ、これを考へる時には實際私共は絕望せずには居られません。けれども、私共はまだ〳〵絕望する必要はない。なぜなら、新聞にも現れず、世間の問題にもならない處に眞の國民的力が躍如としてゐるのを知つてゐる。

その力が實に復興の力です。社會の表面に顏を出さず、新聞紙上に名も出ない、唯々、其の日其の日の業務に孜々として勵んでゐる一部の國民を私は祝福して止みません。同時に、これ等の國民の自由活動が防げられないことを私は希望して止まない。そうすることが復興の一要素であることを忘れてはならない。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

人、社會、社會學

（既でに絶版になつてゐた山田嘉吉氏著「現代社會學」を今回全部書き直し「世界文庫刊行會」から「社會學概論」として出版されることになりました。次の一文は其の序文です。）

人間は、少なくとも、現代人は自分自身で社會を造るのではなく、社會の中に生れるのである。そして、その社會に適合するように育てられ教育される。

各人は生れると直ぐ社會環境の中へ投げ込まれるので、そして、彼の一生の仕事は、彼自身のため、並びに同胞のためにその環境を最善に利用することである。とは云つても大多數の人は自分自身と自分自身に極く近い關係にある人々のためを思ふだけであつて、一般同胞の利益は殆んど無視してゐる。たゞ意識がだん〳〵と擴がつて行くに從つて、環境なるものもだん〳〵廣くなつて行くと家族と云ふものをはツきり意識すると同時に、家族以外の大きな世界に付ても自覺して來るのである。

家の中から見る世間、または旅行中に見る事物から彼の目の前には、知慧の世界が開けて來て、

それが徐々とはツきりとしたかたちとなつて現れ、そして、自分と同じやうな境遇の特長を備へた世界に氣が付て來る。なほ成長して來ると、この社會に組織と云ふ事實が存在してゐることを理解する。のみならず、その組織則ち學校とか組合とか軍隊とか、またはその外のいろ〳〵の社會制度の中へ彼は引き入れられて行き、それが彼の生活の一部となる。そして、彼が一人前になる時分には社會の事實を充分に呑み込み、承諾する。つまり、その社會が彼の環境なのである。

なほ委しく云ふならば、多くの個々人、會合、習慣、制度、權利と義務、苦と樂、望みと恐れ、及び、生存競爭と云ふやうなものゝ混合が彼の環境であり、世界である。で、この複雜なものを中心として起つて來るあらゆる現象、及びその複雜なものゝ中に置かれてある自分の位置、及びまたそれ等の複雜なものと自分との關係に付て起つて來るいろ〳〵の問題に付て彼は理解しようと企てる。

勿論、その過程は、人々の性質により、また人々の屬する階級により大きな差があるに相違ない今日迄の實狀に於ては、女子よりも男子の方がより遙かに組織された社會環境により多く接近して居た。從つて、女子の經驗は男子の經驗のやうに自由でなく、廣くなかつた。また中流以下の階級

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

に屬する人々は有産者や、知者階級の人々のやうに外界と接觸する機會が十分でなかつた。

けれども、近時に於ては、最下級に屬する勞働者も女子もいろ〳〵の機關を通して、今迄は上流階級にのみ乃至男子にのみ限られてあつた經驗を享有するやうになつた。今日の勞働者は自由に會合して、そして、所謂社會の構造を評價することが出來る。勞働者にとつては彼等の組合は、中流以上の階級の大學のやうなものである。なぜなら、今日の大學は敎育と云ふよりは、上流及び知者階級の社會的の訓練を受ける處であるから。

さう云ふ風に、各人が一個の社會人となる過程はそれ〳〵異つて居ると云つたが、併し普通一般の人間は自分等を取り卷いてゐる環境を哲學的に考へようとはしない。從つて、その環境に付て何等反省する處なく、單に承諾してしまう。と云つて、その環境との關係は經驗にならないかと云ふとさうではない。經驗はやはり經驗である。つまり、單に承諾してしまつても、それはやはり知識の一部になる。であるから、前にも云つた通り、人間は複雜な社會の中に生れ、そして、自然の過程を經て、その複雜な社會が彼の生活の一部になるのである。

で、私はこの「社會學概論」に於て、まづ普通人のその世界觀の社會的內容を基礎として解釋を加

へた諸家の說明を、則ち理論を紹介しようとする。諸家の意見は、その理論に於いては皆別々であるやうに見ゆるけれども、しかし彼等は皆同一の社會現象を基礎として考へたものであるから、そこには自らなる共通點があるわけである。故に、私はそれ等のいろ〳〵の意見を結び付けようとする。

我々の社會研究の內容は何であるか？　いろ〳〵の斷片的な經驗と經驗との間の關係、及び、個人、會合、制度等が接觸する點、つまり、所謂社會に於て每日々々我々が經驗するもの、接觸するものゝ間に存在する關係は何であるか？　換言すれば、甚だ不完全に組織され、甚だ不完全に意識してゐる我々の社會の構造は何であるか？それらの疑問に付て出來るだけ簡單に述べて見ようと思ふ。そして、それが則ち社會學である。

さて、その社會學的思想の基礎は何であるかと云ふと、社會學の主もなる要素は（一）有機體的社會の概念、（二）その社會員の有識な集合的行爲を認めること、（三）社會の構造と活動を科學的に解剖すること等である。そして、社會學の先驅者はどう云ふ風にして社會に接近して行つたかと云ふと、それは、宗敎、政治、經濟、倫理を通し、及び心理現象を通して接近して行つたのであつた。

そのうちで、社會を研究する上に最も勢力のあつた人は、伊太利のビコーであつた。彼は「歴史は恰も有形科學と等しく一定の法則によつて支配されてゐる。」と云つた。その次には佛蘭西のモンテスキユーであつて彼はその著「法律の精神」に於て政治の研究に新しい方法を應用した。同じく佛人チユルゴーは財政學、經濟學、及び、政治學に進化論的説明を應用し、またコンドルセーは人間の心の進歩を研究して、社會制度が完全になり得る可能性を主張した。それから、アダム・スミスは個人と階級との相互依頼を説明し、ミルは社會學の必要を確證した。

その後、コントによつて「社會學」の名稱が造られると同時に社會學の土臺石は据へられたのである。勿論コントが社會學を創造したのではない。たゞ名稱とプログンムを造り社會學の位置を科學のうちに確立したのである。そして、コントの社會學のそのプログラムは自然科學の實證的な方法を政治學と歴史に延長しようとし、その實行上の目的は政府を實證科學の基礎の上に置き、歴史上の豫言を天文學上の豫言のように正確なものにしようとした。一言で云へば、コントは政府を專門の科學とし政治を職業としようとしたのである。

コントから直ちにスペンサーに社會學は移つて行つた。スペンサーはコントが据へて置いた土臺

石の一部分を借りて彼の社會學を造つた。そして、スペンサーは云ふ。『コントの仕事の偉大さを我々は見逃してはならない。事實を見るコントの方法は實に哲學的である。彼の社會學に關する學說は別として、彼の社會現象を考へる方法はそれ以前に存在してゐた凡ての方法に勝つてゐる。』と。

社會學は先づコントとスペンサーの努力によつてかたちを爲し、そして、以來進んで今日になつてわけである。で、コント及びスペンサーの後を受けて社會學に貢獻した社會學者の說は次に章を追ふて說明しようとするものゝ中に大略網羅するつもりである。

農村生活と都會生活

私の娘時代と農村

前號掲載草間判二氏の歌を讀んで私は私自身が農村の父母の膝下に居た頃のことをお話して見ようと云ふ氣持ちになりました。

私共の父母は娘達を斷じて農家へ緣付けようとはして居ませんでした。『土にまみれて一生涯を送

るのはつまらないことだ』こう云ふ考へは私共の父母ばかりが持つて居るのではなく、私が知る範圍内の農村一般に漲つてゐる考へです。

　ですから、全然餘裕のない其の日々々々の生活に追はれてゐる小作農者は別として、いゝ加減の田畑を所有してゐて幾分生活に餘裕のある農家では農事の比較的暇な時を見ては娘を裁縫の稽古に通はせたり、遊藝のハジカケを習はせたり、そして、年頃になれば町方の生活になづませるために『行儀見習』ひと云ふ名稱で都會の良家へ奉公に出すのが慣例となつてゐました。

　娘共も、もの心が付くか付かないうちから父母のさう云ふ言葉を聞いて居ますし、又、事實に於て、勞力の多い、報ひられる處の少ない農家の生活を見て居りますから何の疑ひもなく親の方針に從つてしまいます。そして、農村に一生を送ることは自己の存在を埋もれさせることであるかのような信仰を持つてしまいます。ですから、農家からの緣談などに對しては『人を馬鹿にするな』と云ふような態度を取つて振り向きもせず、ひたすらに、農村を捨てることが出世の第一歩であり、人間らしい生活に入るかどでゞあるかのように思ひ込んでしまいます。

　其の頃、其の地方では百姓の娘が水兵の妻になることが流行のようになつてゐました。『御亭主の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

月給はたつた六圓だけれど、御亭主は船で食べて居るし、着るものはお上から出るしするから、おかみさんは間借りをして居ておひるにやき芋でも食べて居れば足りるそうだ。何にも用が無くて一晩おきか二晩おきに上陸して來る御亭主の相手をするのが仕事だそうだ。」と話し合ふ百姓の女房達は餘まりに簡單な其の生活に對して幾分侮蔑の意味を含ませて居るとは云へ、併し、全く心身を勞することのない さう云ふ種類の生活に羨望の目を投げてゐたのは確かでした。

私の中年時代と農村

農家の生活を嫌ふと云ふよりも、むしろ、無意識の間に「農家に入るものではない」と云ふような觀念をいつの間にか造つてしまつて居た私共姉妹も、とにかく、唯、樂に食べて行けさへすればよいと云ふように人生を簡單に考へることが出來なかつたものですから、都會に出てからは確かに農家に入つた以上の勞力もしましたし、心勞を嘗めて居ます。そして、これは都會に出て生活の道を立てようとする人の等しく經驗する處でせうが、併し、生れて以來田舍にばかり生活してゐた近所のおかみさん達はさう云ふことを知りません。

或る時、私が妹と共に病父の見舞ひに行つた時に、其のおかみさん達が「お前さん方は幸せだなうまいものを食べて、いゝ着物を着て、そして、樂をして居るだ」と云つたのでタイピストをしてゐる妹がスッカリ憤慨して「何んですつて、あなた達は私達が毎日遊んで暮して居ると思つて居るのですか？　冗談云つちや困りますよ。私達がこうして時々父を喜ばせるために田舎へ來るにはどの位ひの苦勞をするかゝあなた方は知らないの。毎日々々時間で體を縛られて、自分の體であつて、自分のものでないようにして、フー／＼云つて働いて、そして、時々こうして出て來る餘裕をやツとのことで造り出して居るのですよ。あなた方が田畑で働くよりどの位ひ神經を痛めながら働いてゐるか？」滔々と妹は辯じ立てゝ居ました。

實際、豐かな財產を所有して、文明のあらゆる利器を充分に利用して遊んで生活して居る人間も都會にはあります。けれども、さう云ふ人は極く少數で大部分の人間は農村に居るよりも遥かに單調な苦しい生活を送つて居ます。まるで、機械にされてしまつてゐます。

井戸から水を汲み上げる代りに水道口をひねればいくらでも水は出て來る。山林へたきゞ取りに行く代りにマッチ一本摺りさへすれば強い火力のギヤスがどん／＼燃へる。苗床に種を下していよ

〲米を取入りれる迄の半年以上の間の莫大なる苦勞と勞力を費す代りに、米屋へ聲をかけさへすれば米は運び入れられる。けれども、水を汲む時間たきゞ取りをする時間、米を造るだけの月日を都會に住む者は享樂のために、乃至、自己向上のために費し得るかと云ふとなか〲さうではない。

多くの場合ひ、大急ぎで其の水を使ひ、火を用ひ、御はんをかツこむようにして與へられた仕事に取ツつかなければならない。人間一匹が機械なのですから、其の機械の能率を上げるために其れ等の水、たきゞ、及び、米等が速やかに供給されると云ふに過ぎない。勞働爭議の根本精神はいつも此處にあるのです。つまり勞働者が人間として取り扱はれてゐないと云ふ處から出立してゐるのです。して見ると、自分の意志によつて動き、自分の一家が使川するための水を汲み、たきゞを取り、米を造る農家の生活の方が確に人間らしい樂しみのある生活であると考へられます。

のみならず、都會の生活は多くの場合、向ふ三軒兩隣りとさへ、「何處の馬の骨か？」と云ふような目をしてお互ひに瞰め合つて生きて居ます。田舍に居れば「あの人は何處の誰」と皆が知つてゐて、多少の尊敬心や親しみを現して呉れますが、都會に居れば人間一匹の價値は下落して、死なうが生きようが自分の肉親の者の外は誰も振りむきもしません。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

こう考へて來ると、自己の存在を埋もれさせる處は田舍ではなくて都會ではないでせうか？
私共が米國から歸つた時には私共は都會の生活にあき〳〵してゐました。農家である兄の家に其の當時暫く滯在して居ましたが、其の時には夫が四十二歳、私が二十八歳で體力がまだ〳〵盛んでありましたから、どうかして農業によつて生計が立てられるならば田舍に落付きたいと思ひました以前、父母が云つた「土まみれになつて一生涯を送る」ことは、目まぐるしい都會に四六時中神經を尖がらせて居るよりは遙かに人間らしい生活であると考へるようになつて居ましたから。
けれども、畑が一枚あるではなし、家があるではなし、それ等を買ふ金があるではなし、どうにも生計の立てようがないので、矢張り、それ迄に得てゐた經驗を利用し得る仕事を探さなければならないし、それには都會に出なければならないのでした。

私の目下の要求

以上ざツと述べたような經驗を持つて居りますので、田舍にばかり居なければならない方達の心境がほゞ了解出來ます。同時に、都會生活を御すゝめする心持ちにはなれない。いら〳〵しい苦し

い都會生活を御すゝめする程、うすつぺらに不人情にはなれない。

では、どうすればよいか。

私は思ひます。

文化の中心を都會にばかり置かないで、津々浦々迄も其れを普及し、農業地の青年男女が意を安んじ、人生を樂しみ得るように、政治家、教育家、宗教家、及び其の他の有力者は其處に興味と力を注入しなければならない。同時に地方の有意な青年男女は都會にあこがれを持つ代りに地方文化の建設に努力して頂きたいと。

今日に於ては、其の企てが既でに始められてはありますが、併し、指導者の誠意が充分でなかつたり、不純な動機が加はつたり、概念が間違つて居たり、且ツ又、地方青年の思慮が足りないためにに文化の根を地方に植付けようとはせず、單に文化の花を取り挿し花としたりしてゐて、地方文化の建設に資する處が少ないのです。

一國の腦髓である都會にばかり學問、藝術、及び金力が集中して、優秀な地方青年男女がまた其れに引きづられて都會に出てしまう結果、我が國の胴體（農業地）は痩せ衰へ、ヒヨロ〳〵になつ

て頭デツカチの國家になつてしまいました。不健全な此の狀態は田舍に居る人も苦しいし都會に居る人も决して樂ではない。

其の後の草間氏の御手紙に「併し、何時かは自分の生活を讃美する時機のあるべきを期待致し居り候」とありましたが、さうですとも、其の時期が來なければならない、否、來らさなければならない。草間氏を始め全國の農業者が自己の業務を讃美し、樂しく其の業務にたづさはれるよう、施設をし、文化を普及しなければやがて我が國は立ち行かなくなることを今にして政治家、教育家、宗教家、及び、其の他のあらゆる有力者は氣付かなければならない。

農業國でありながら、農村の利害を無視して都會にばかり興味と力を集中してゐた愚を今にして悟るように私は世の識者に警告する。同時に、國の基礎を構成してゐる貴い農家の青年達を尊敬するように、私は自分の娘時代の誤まつた考へに鑑みて地方の若き婦人達に忠告しようと思ひます。

火星、墓地、日本髮

近所の二階の手摺から往來から「火星々々」と云ふ聲がするので自分もやつぱりツイ釣込まれて手摺から首をのばす。日頃見なれてゐる外の星と別に變つた處は認められない。いくらか赤味がかつてゐると云ふことの外は、けれども何か變つた處が見付かりそうなものだと思つて猶見つめてゐる。するとフランスのドッドゥイと云ふ畫家が描いたと云ふ火星人（どの新聞にも出てゐたあの章魚入道のお化見たひな）がウヨ〳〵してゐるような氣持ちがして來る。「先入主となる」と云ふことを思ふ。

　近頃、同情に價するものは僧侶達の東京市内墓地移轉に對する反對運動と髮結達の西洋風結髮排斥日本髮奬勵運動であつた。僧侶達の見地から又髮結達の立場からはそれは尤もな云ひ分であるに相違ない。それは充分に認めもするし同情もする、けれども、何處に安置してあつても死んだ人のためには同じである墓を狹隘に苦しむ市内に置かればならないと云ふ理由はどうしても見出されない。日本髮は舊日本の遺物として見て美しいものではある。飾り物としての女、デックリ坊としての女には誠にふさはしいものである。けれども、最高度に心身の活動を欲する女には到底我慢が出來ない。尤も髮結さん達が排斥の對稱とするものは日本髮と等しく髷や詰ものを使用するハイカラ髮ではあろうがとにかく、ごて〳〵いろんな物を喰付ける日本髮は新時代の活動的な婦人とは緣が切れたものである

（八月二十四日）

地球が動搖して居るらしく絶へざる地震、旱魃、此の二三日は又大雨で寒い位ひ皆樣の御自重を祈る。

本誌臨時定價表

一册	金十錢	送料五厘
六册	前金五十五錢	（送料共）
十二册	前金壹圓	（送料共）

●誌代及郵税は前金の事●御送金の際は振替貯金東京五三六八八番に御拂込みのこと●郵券代用は五厘切手にて一割增●廣告は御照會次第御相談いたします

大正十三年八月廿三日印刷納本
大正十三年九月一日發行

東京市四谷區南伊賀町四一
編輯兼發行人　山田嘉吉

東京市牛込區山吹町一八九
印刷人　大杉直次郎

東京市四谷區南伊賀町四一
發行所　婦人と新社會社
振替東京五三六八八